

文学部

文学部生のリアルな学生生活

Vol.34

文学部生のリアルな学生生活の様子を掲載し、ご父母の皆さまに文学部生の充実したキャンパスライフの風景、また文学部ならではの取り組み等の情報を発信いたします。

夢と試練を 与えてくれた箱根駅伝

2021年

文学部人文社会科学科心理学専攻卒業
静岡県立韭山高等学校出身

三須健乃介

箱根駅伝。毎年1月2日から3日にかけて行われる駅伝。東京大手町から箱根まで一本の襷をつなぐ駅伝。僕に夢見させ、挫折させ、夢を現実にする喜びを教えてくださいました。僕が初めて箱根駅伝を生で見たのは10歳のとき、凍てついた空気の中をあっという間に駆け抜けていく選手を目の当たりにしたその瞬間、自分の中で夢が明確に決まった。箱根駅伝を走りたい。それからは、常に箱根駅伝に出るためにどうすればいいのか考えて行動す

るようになった。中学生のときは箱根駅伝のスター選手のフォームをまねし、高校を選ぶ際は陸上を入れていた高校、そして大学を選ぶ際は関東の大学で箱根駅伝に出ている大学が条件だった。

そして、入学したのが中央大学だった。

ようやく小さいときの夢を叶えられるステージに立ったと思いきや、入学式ではニヤニヤが止まらなく隣の人が変な目で見られていたと思う。大学での練習は、朝5時に起きて5時半から朝練がスタート、午前練習は11時からスタートの毎日2部練習、毎日ヘトヘトであったが、夢にどんどん近づいている気がして毎日がとても充実していた。中央大学は、箱根駅伝最多優勝回数を誇る名門であり、OBの支援や練習環境なども充実していて、本当にこの大学を選んで良かったと感じた。憧れの舞台で陸上をすることができ、これから大きく成長できたいムも上がると思っていたが、現実はなかなかうまくいかず、実際大学1年生では記録

が伸びず、箱根駅伝のメンバーに入ることができず悔しい思いばかりしてきた。高校生のときは自分がエースで、チームを代表して試合に出ることが多かった。しかし、大学では全国の強豪校からエースたちが集まり、その中でレギュラーを争わなければならなかった。自分がレギュラーに入れない現実を受け入れ難く、自分自身に失望してしまうことも多かった。2年生になっても記録はなかなか伸びず、次第に箱根駅伝を目指すよりも目の前の練習をただこなしていくだけになってしまった。そのようなマインドで練習を続けていても力は付かず、チームのために力になれない自分に存在価値はあるのだろうかと思いつつ、アイデンティティを喪失してしまふこともあった。結果を出すことができず、監督からもマネージャーへの転向を促された。陸上を続けてこんな嫌な思いをするならいつそやめてしまおうと思いき、退部を決意した。寮から出て地元静岡に帰ろうと電

車に揺られているときに感じていたのは、陸上をやめた後は一人暮らしをして学生生活をエンジョイしようという妄想ではなく、本当にこのままやめていいのか、陸上をやめたら自分が自分でなくなってしまうのではないのかという葛藤だった。電車が地元の沼津に近づくにつれて、幼いころの純粋に箱根駅伝をめざしている自分を思い出した。あのころは箱根駅伝に出たくて、常に箱根駅伝に出るために今どうすればいいのか考えていた。それに比べて今の自分は結果の出ない自分から逃げて、夢から目をそらして、目の前の練習をただこなしているだけではないか、本当にこのままでいいのか、僕は今なんで陸上をしているのだろうか、答えは簡単だった。箱根駅伝に出たいからだ。やはり箱根駅伝にどうしても出たい。ここで絶対逃げちゃだめだ。そう思いすぐに東京へと引き返して部に戻った。部





の仲間や監督、コーチたちは一度逃げ出した自分を非難するわけでもなく快く受け入れてくれた。そこから目的と目標を分けて考えて行動することの大切さがよくわかった。箱根駅伝に出たいという目的に対して、その前の大会でこのような結果を出したい、このようなタイムで走りたいという目標がある。つまり、何かしたいという欲求の目的から逆算して目標を定めていく、目標とはいわば目的というゴールに向かうための道しるべだと感じた。中高生のときはそれが自然にできていた。箱根駅伝に出たいという目的に対して、このタイムで走るという目標、この高校に行こうという目標。大学に入ってからは、目的と目標が混同して今の努力がなんのための努力なのかよくわからなくなっていた。この、目的を目標と分ける考え方は自分の腑に落ちた。箱根駅伝に出るためには、まずは箱根駅伝予選会を突破しないといけない、箱根駅伝予選会のメンバーに入るためには夏合宿でAチームに入らないといけない、Aチームに入る

ために半月後の競技会でこれくらいのタイムで走らないといけない、半月後の結果を出すためには1週間前にこれくらいの練習をしないといけない、では今、自分は何をするべきか、これを1日1日に落とし込むことで、箱根駅伝出場というゴールに向けて、その日その日で価値を生み出すことができた。そこからは簡単だった。惰性で生きる日々箱根駅伝出場への1日という意味ができたことで、毎日が夢に向かって前進し、2年生でなんと箱根駅伝に出場することができた。箱根駅伝のスタートラインに立ったときの、10年間思い続けた夢が叶った高揚感、大観衆の声援は今でも鮮明に覚えている。苦しいこともあったけれど、夢から逃げずに追いつけることができて幸せだった。監督からは、「あのとき、部を辞めると思っていた君が、正直1年間でここまでくると思わなかった」と、言われた。僕自身も正直、4年の間に1回でも箱根を走りたいと思っていたものの、まさか2年目で走れるとは思っていなかった。ただ毎日を目的のために無駄なく過ごすことで、1段1段階を登り、気付いたらとても高いところまで登っていたという印象だ。最終的に、4年生でも箱根駅伝の4区を走ることができ、通算で2回走ることができた。中央大学の4年間は大きな挫折もあったが、箱根駅伝という夢のおかげで毎日充実して過ごせた。何より大きな挫折があったからこそ自分の考えの確立、夢を叶える喜びがあった。この大学に入学できたおかげでも大きく成長することができた。ありがとう中央大学。ありがとう箱根駅伝。

文学部だより

東洋史学共同研究室の紹介

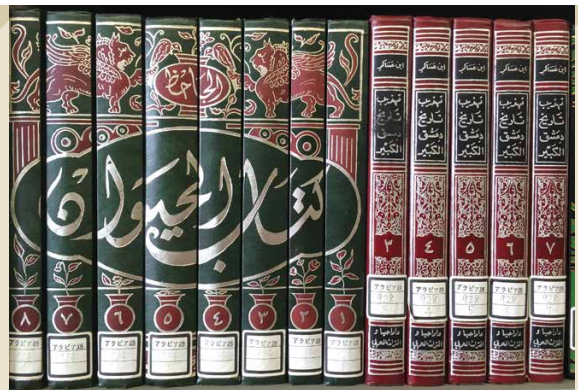
文学部東洋史学研究室

中央大学の東洋史学専攻では、中国・朝鮮からインド、東南アジア、中央アジア、そしてイスラム世界まで、多様な地域の歴史について学ぶことができます。

東洋史学というと難解なイメージがあるかもしれませんが。しかしながら、その扱う広範な地域にはバラエティに富んだ国や文化が存在し、歴史に登場する人物も多士済々、そこに自分なりの課題を見つけ、追究する楽しみは尽きないものです。毎年提出される学生たちの卒業論文のテーマも多岐にわたり、新たな発見がいつもあります。

東洋史学の扱う地域の多様さに対応して、共同研究室の所蔵する文献も、和書・洋書のほか漢文、中国語、ハングル、アラビア語、ペルシャ語などさまざまです。開架式で閲覧できる豊富な資料は、他大学や海外の研究者、大学院生にも好評です。

共同研究室には室員2名が常駐しており、授業の課題



や卒業論文に利用する資料探しのときなど、いつでも相談に乗っています。今は何でもインターネットで検索できますが、概説書や研究書、その時代の人間が残した記録をじっくり読み、歴史上の事柄や問題についてより深く体系的に知ること、ほかとは違った視点を得ることができます。

共同研究室では専攻の先生方から海外での研究活動のお話を伺う機会もあり、エジプト、中国、ウズベキスタン、カンボジアなど、研究者の目から見た現地の様子が興味深いです。

歴史を知ることとは現代を知ることにつながっていく。そんな学びのためにも、東洋史学共同研究室を存分に活用していただければ幸いです。